

永遠の生命

僕は学生時代、何度も人の死に立ち会った。

映画「赤ひげ」ではないが、死とのたたかいはなんと壮絶で神秘的なのだろう。

死を迎えたとき、その肉体のどこで、どのような仕組みがなされ、息絶えたときに浮かぶ一種の法悦感は、何を物語っているのだろうか？

死とはいったい何だろう？

そして生命とは？

この単純でしかも重大な問題は、人間が有史以来とっくんで、いまだに解決されていないのだ。ある人は、宗教的にそれを解釈し、あるいは唯物論的に割り切ろうとする。

ある説によれば、霊魂は物質として存在し、肉体を離れる時にはその重さだけ体重が減るといふ。

ふくぎつな蛋白質—コロイドと呼ばれる状態—には、疑似生命状態が見られ、逆にビールスの中には、生命があるのかも疑わしいものもある。

生命が物質なら、それに霊魂があるのだろうか。

人間は何万年もあした生きるためにきょうを生きてきた。明日への不安は死への不安であり、夜の恐怖は死後の常闇の世界の恐怖とつながっていた。人間の歴史の、あらゆるときに、生きるための戦いがなされ、宗教や思想や文明のあらゆるものが、生きるためのエネルギーに結びついて進歩した。

「火の鳥」は、生と死の問題をテーマにしたドラマだ。古代から未来へ、延々と続く「火の鳥」—永遠の生命—とのたたかいは、人間にとって宿命のようなものなのだ。

(手塚治虫)



空き家になっている友人宅の机の上に無造作に積んであった本の中に「火の鳥」を見つけました。(1～7編)

以前に、読んだことのある本でしたが、また読み返しました。

「火の鳥」の物語は、個人の人間を超え、人類を越え、地球をも、そして宇宙へ。

おそらく、「永遠」の存在は、宇宙をも超えていると思う。

2020年9月